

神経難病を支える作業療法

特集にあたって

神経難病のような希少疾患は、臨床現場で経験を積みにくい。しかし、以前に比べ神経難病患者を受け入れリハを実施する病院が増え、入院患者として担当する OT も増えてきた。また、長期慢性の経過をたどることで、訪問リハの対象者として担当する OT も少なからずいる。

一方専門病院では OT が中心的な役割を担って、人工呼吸器装着で失われる ALS 患者等に対し自身の声で発声するコミュニケーションエイド「マイボイス」を開発し、マスメディアに取り上げられるような実績を残している。

今後 BMI（ブレイン・マシン・インターフェイス）技術の発展で、コミュニケーションのみならず、神経難病患者の利用を目的とした生活支援機器の開発が予想される。地域への職域拡大を目指す OT にとって、神経難病患者への機器の適合による QOL 向上の取り組みは、欠かせないものになると思われる。

このような状況から、神経難病の治療やリハの現状に加え、病院と地域、医療と福祉等、連携に関係する制度、関連職種の役割の理解、神経難病患者の生活の質、就労状況等、神経難病患者を担当するうえで役立つ知識と技術の伝達を目的に本特集を企画した。

最後になりましたが、ご多忙の中、ご執筆いただきました先生方に感謝申し上げます。
(田中勇次郎)

企画担当

田中勇次郎（東京 YMCA 医療福祉専門学校、作業療法士）

江藤文夫（国立障害者リハビリテーションセンター顧問、医師）

山本伸一（山梨リハビリテーション病院、作業療法士）